

自序 二

一 昨年冬『自分の畑』の出版以後、『雨の日の書』を書き始めたが、半年のうちに六篇書いただけで、中止してしまった。だがこの題目は気に入っているので、いま相変わらずこの小さな書物の名前に持ってきた。

この集には全部で五十篇の小文があり、十分の八はここ二年来の文で、「初恋」など五篇は『自分の畑』から選んだ。これらは大抵が雑感随筆の類で、批評とか論文といったものではない。話では天下の人は最近もうこうした小品文は読み飽きたそうだが、わたしは長篇の大文は書けないから、それも仕方がない。わたしの考えはもともとただ自分が言わねばならぬことを言いたいだけで、そうした話は面白くないし、言ってもうまく言えず、長くもないのは、もともとわたし自身の欠点である。欠点も一つの特徴であるのだけれども。こうしたものを発表しても、見飽きた人は自ずと見ないだろうから、他になんの面倒もない。ただ出版した書店がいささか損失を被るだけだろう。なんとか、わたしはそう願うのだが、その損失があまり大きくならないように。

わたしはこの小書を編み終わって、よくよく考えてみたが、いささか驚きを禁じ得ない。というのは意外にも二つのことを発見したからである。一つは、わたしがなんと道德家であったことだ。わたしは極力あらゆる家のうちから脱却しようとしたのだけれども、たとえば文学家とか批評家とか、むろん道德家は言うまでもない。わたしが普段から最も嫌いなのは道学者である。（あるいは新式に倣えばパリサイ人である）それがなんとまさに自分が一人の道德家であったせいだとは。わたしは彼らの偽道德、不道德な道德を打破しようとした。しかし同時に無意識的に自分が信じる新しい道德を打ち立てようとしていたのだ。自分の一篇一篇の文章を読んだ。中にはいずれにも道德の色彩と光芒が含まれていた。外面はゴロツキのような土匪のようなことを言っているけれども。わたしは道德のための文学に反対していたが、自分ではどうしても文章のための文章を一篇として書いていない。結果は何巻かの説教集を編集しただけだ。これはなんと滑稽な矛盾であろう。仕方がない、どうせ文苑伝には入りたくないから、（むろん儒林伝にも入りたくない、）そうしたことは構う必要はなく、やはり“吾が好むところに従って”、ずっとそのままやっ行ってこう。

二つは、わたしの浙東人氣質が結局抜け切れていないことである。わたしたち一族は紹興にただ十四世いただけで、その先はどこの人か判らない。普通は湖南道州だと称するけれども、もつと遡れば自ずと魯の国である。この四百年の間の越中の風土の影響はたぶんとても深く、それがわたしの抜きがたい浙東性をつくりあげたのだろう。これがつまり世人の言う「師爺の氣」である。もともと師爺と質屋の番頭は紹興の出す悪い物で、民国以来すでに次第に減少してはいるが、その法家の過酷な態度は、決して職業だけに限らず、田舎にまで瀰漫して、まるで一種の潮流になった。清朝の章実斎、李越縵はすなわちこの派の代表であって、彼らはいずれも人を罵るのが好きという癖がある。わたしは小さいころから“病は口から入り禍は口から出る”という古訓を知っていた。後で又紳士淑女の中に跡を晦まそうとして、さらに努力して何事にも慎重たら

んと学んだが、旧性移し難きをいかんせん、燕尾の服は終に羊の脚を隠すことはできなかつた。旧作を調べて見るに、どうもでたらめばかりで、殊に敦厚温和の気が少ない。ああ、我それ終に“師爺派”となるか。しかれどもこれまた仕方がないに属し、わたしは自分が越人であるからといってわざとそうする必要もないし、またそれを学士大夫が喜ばないからといってわざとそうしない必要もない。わたしには京兆の人たるの志があるが、自然はわたしが浙の人でないとも認めない。ならばわたしも勝手にやるしかない。

近ごろ文章を書くに平淡自然な境地がとても羨ましい。しかし古代あるいは外国の文学を読んで始めてそういう作品に行き当たり、自分では夢にもそうしたものが書ける日が来るとは思わない。なぜならこれには気質・境地と年齢の関係があつて、無理をすることはできない。わたしのよ様な急性な癖のある人間が、中国のこの時代に生まれて、従容として静かに平和で角のない文章を書けるなどと望むのは実に難しい。わたしはただ希望し、祈る。わたしの心境がこれ以上ざらつき、荒れ果てないように。それこそがわたしの大願望である。最近三、四カ月の文章を調べると、多くが例によって道学者を罵るものだが、事柄が無聊な上に、人もまた無聊で、文章も無聊である。つまりこのような本にさえ入れるに値しない。わたしの心は本当にすでにあまりにも荒んでいる。田園詩の境界は以前偶然の避難所であつた。だがこれとも近ごろはいささか疎遠になつた。今後はどうすればよいか、よくよく考えねばならない。——ただ残念ながら今の中国では考える余暇すらない。

民国十四年十一月十三日、病中枕によりて書く。

イギリスの十八世紀にジョン・トーマス・スミス (John Thomas Smith) がいて一冊書物を著した。それも『雨の日の書』 (Book for Rainy Day) と訳せるが、彼のは雨の日に読む本ということで、わたしの考えとは違う。その本をわたしは見たことがなく、ただ詩人ブレイク (William Blake) を述べた本のなかで引用された一節を読んだだけである。なぜなら彼はブレイクの良い友人であるから。 十五日また記す。

※初出：1925年11月30日『語絲』第55期